

# ディジーズ・マネジメント・レポーター

## Disease Management Reporter in Japan

2010年6月 No.18

### NPO法人地域健康づくり支援会ワンツースリーによる 「ふまねっと運動」を用いた高齢者の健康づくりの取り組み —高齢者ボランティアの育成と組織化—

NPO法人地域健康づくり支援会ワンツースリー（以下、「ワンツースリー」とする。）は、北海道教育大学釧路校の教員と学生、地域住民が中心となって2005年10月に設立した団体であり、高齢者向け運動プログラム「ふまねっと運動」の普及、啓蒙活動を中心に事業を展開している。ふまねっと運動は、「踏まない」、「ネット運動」が名称の由来である。マス目上に並べた「ふまねっと」を踏まないようリズムを取りながら注意して歩く運動プログラムであり、高齢者の歩行機能や心理面の改善、認知症予防が期待できる。笑いの絶えない運動の様子や効果の高さが注目を集め、全国の新聞、テレビにも度々取り上げられている。

ワンツースリーは「ふまねっと運動」を核として、地域社会の協力する力を高めるという目標を持って事業を展開している。ワンツースリーの活動の特徴は、ふまねっと運動の効果に加え、自主的に活動を行える高齢者ボランティアを育成、組織化しながら、自主財源の獲得に取り組むこと等により、持続可能性を確保しようとしている点にある。

本号では、「ふまねっと運動」の開発者であり、ワンツースリーの理事長でもある、北海道教育大学釧路校の北澤一利准教授ならびにワンツースリー事務局長尚和里子氏に対する取材をもとに、ワンツースリーの取り組みを紹介する。

## NPO法人地域健康づくり支援会 ワンツースリーの概要

NPO法人地域健康づくり支援会ワンツースリー（以下、「ワンツースリー」とする。）は、北海道教育大学釧路校の教員、学生、大学周辺の地域住民が中心となり2005年10月に設立された団体であり、代表は同大准教授の北澤一利氏が務める。現在は、同大学の地域教

育開発専攻地域教育分野研究室と共同で、マス目上のネットを用いたユニークな運動プログラム「ふまねっと運動」の普及、啓蒙活動を中心に事業を展開している。ふまねっと運動は、高齢者の歩行機能や心理面の改善、認知症予防に対する効果の高さやユニークさが注目を集め、全国的な広がりを見せ始めている。

ワンツースリーは、「持続可能な地域住民主体の健康福祉社会を実現すること」を理念として掲げ、過疎化の進む北海道にあって、これまで社会福祉や行政サー

### 目次

NPO法人地域健康づくり支援会ワンツースリーの概要	1
ふまねっと運動について	2
ワンツースリーの取り組み	4
今後の課題	7



ビスの受け手であった高齢者を「担い手」へとプロモーションし、高齢者が力を発揮できる活躍の場を提供することを目指している。そのための手段として、高齢者ボランティア「サポーター」を継続的に養成し、サポーターがふまねっと運動の指導者として、高齢者向け「健康教室」を自主運営できるように仕組みづくりや働きかけを行っている。また、こうした高齢者の主体的な取り組みを通じて「地域社会の協力する力」を高めたいとしている。

## ふまねっと運動について

### 1. ふまねっと運動とは

#### (1) ふまねっと運動の概要

ふまねっと運動とは、50cm四方のマスを縦10マス程度、横3マス程度に網の目上に並べた「ふまねっと」を踏まないよう注意して歩く運動プログラムであり、「踏まない」「ネット」運動がその名称の由来である(図1参照)。笑いの絶えない運動の様子に加え、運動面、心理面等の様々な効果が注目を集め、全国の新聞、テレビにも度々取り上げられている<sup>1)</sup>。

図2は、ふまねっと運動のステップ例を示したものである。数字の順番に、一定のリズムで一歩一歩、次のマスに足を運ぶ。後ろ向きに足を運ぶことはなく、前向きに全てのマスを進むと終了となり、これを休憩を挟みながら繰り返す。ステップには多くの種類が用意されており、初級向けの簡単なものから、ステップに手拍子を合わせた上級向けのものまで、現在100種類以上が考案されている。

#### (2) ふまねっと運動の特徴と理論

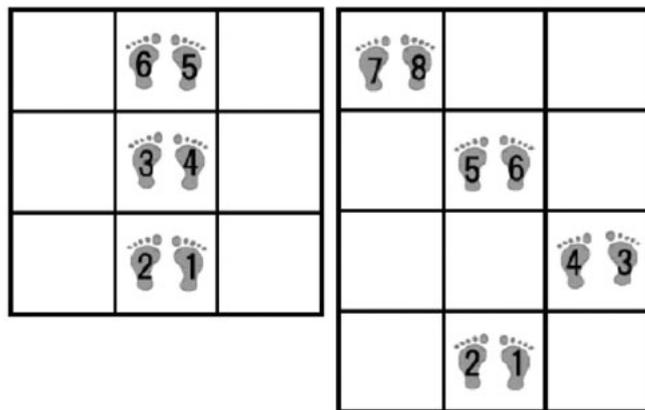
全国各地の自治体や研究機関で、介護予防を目的とする新しい運動プログラムが盛んに開発されているが、

図1 ふまねっと運動を用いた健康教室



(出典) 釧路市内での健康教室の様子 2009年10月編集部が取材先で撮影。

図2 ふまねっと運動ステップ例



(出典) NPO法人地域健康づくり支援会ワンツースリー提供資料。

ふまねっと運動もそうした運動の一つである。北澤氏は、ふまねっと運動の第一の特徴として、「筋力向上を目的としないこと」を挙げている。北澤氏によれば、現在の歩行改善運動プログラムのほとんどは筋力の向上を目的とした「筋肉」重視であるのに対し、ふまねっとは力強さを求めず、「学習」を重視している。未経験のステップに対して、正しいマスを選択し、左右の足を正しく踏み出し、正しい順序で足を動かす。このような注意深い歩行運動を行うことを通じて、「頭で分かっているけど身体が思うように動かない」ようなズレを修正していくこと、つまり、視覚中枢と身体運動の相互協調動作を改善することが、ふまねっと運動の特徴であるという(表1参照)。

また、北澤氏によると、ふまねっと運動のもう一つの特徴として、運動を通して笑いが引き起こされることが挙げられる。一見簡単そうに見えるふまねっと運動であるが、最初に踏み出す足の左右を逆にすることで、まったく違う運動をしているような感覚にとらわれ、指導者側もよく間違えるのだという。簡単そうな動きを間違えて思わず照れ笑いが起き、周りの人も自分が失敗して笑う、笑いが笑いを呼び、会場はいつも笑い声に包まれている。健康教室に継続的に参加してもらうために、この特徴は非常に重要な意味を持っていると北澤氏は述べている。

### 2. ふまねっと運動の効果

ワンツースリーでは、ふまねっと運動が高齢者の運動機能、心理面、認知機能にどのような影響を与えているのかを測定している。

#### (1) 運動機能に関する効果

##### ①一般自立高齢者の運動機能への効果

表2は、日常生活に支障のない一般高齢者で、ふま

<sup>1)</sup> 2009年3月28日宮崎日日新聞朝刊、2009年8月8日朝日新聞朝刊、2009年9月23日NHK「まるごと北海道なんでもしり隊」、2009年11月23日UHB「スーパーニュース(特集)」、2010年3月9日北海道新聞朝刊等。

表1 従来型筋力トレーニングとふまねっと運動との比較対照表

比較項目	筋力トレーニング	ふまねっと運動
運動の種類	同じ運動の「反復」	未経験の運動の「学習」
重視する点	運動の量： 負荷、頻度、休息	運動の質： 正確さ、タイミング、視覚
注目する部位	末梢組織の筋肉の肥大	中枢神経と末梢筋組織の 協調
解決方法	筋肉の「力」で解決する	動きの「巧みさ」で解決 する
最低必要量	一万歩	一步
動機付け	意欲を高める動機付けが 必要	楽しいため自発的に参加 する

(出典) 北澤一利他「歩行機能改善と転倒予防に「ふまねっと運動」をおすすめします」精神看護2008年7月号(医学書院)。

表2 一般自立高齢者の歩行機能に与えるふまねっと運動の効果

項目	2005年11月		2006年11月		効果
	平均	S.D.	平均	S.D.	
握力右 (kg)	24.5	4.7	25.0	3.7	ns
膝伸展力 (N)	192.8	64.2	179.3	104.8	ns
長座体前屈 (cm)	40.1	5.0	45.8	6.9	※ b
Fリーチ (cm)	31.4	5.3	35.8	12.2	ns
開眼片足 (秒)	128.7	63.6	133.6	73.3	ns
10m障害歩行 (秒)	4.5	1.0	4.2	0.9	※ b
TUG (秒) c	5.0	0.9	4.9	0.9	ns

(注) a.NPO法人地域健康づくり支援会ワンツースリーの健康教室において、毎月2回、1年間継続して参加した一般自立高齢者(女性18名、平均年齢68歳、最高年齢80歳)が対象。

b. p<0.05

c.TUGとは、Time Up & Go の略語であり、座位姿勢から立ち上がり、3m先の印を折り返してきて着地する時間を計測する運動を指す。

(出典) 北澤一利、日本デイケア学会誌「デイケア実践研究」Vol.11, No.2, 2007。

ねっと運動を行う健康教室に2005年から2006年にかけて毎月2回、1年間継続して参加した18名の体力測定の結果である。特に大きく向上した項目はないが、大きく低下した項目もなく、一般高齢者の運動機能が1年間維持されていることが示された<sup>2</sup>。

### ②要介護認定者の運動機能に関する効果

表3 要介護1から3までの介護認定を受けた高齢者において、ふまねっと運動参加群と不参加群にみられた6週間後のTUGの差

対象群	人数	平均年齢	測定項目	改善率 (%)	有意差
ふまねっと運動参加	21名 (男9 女12)	79.05	TUGの歩数	6.94	※
			最大歩幅	6.85	※
			TUGのタイム	9.35	※
ふまねっと運動不参加	17名 (男8 女9)	80.59	TUGの歩数	0.27	ns
			最大歩幅	0.02	ns
			TUGのタイム	3.67	ns

(注) ※ p<0.05

(出典) 北澤一利他「歩行機能改善と転倒予防に「ふまねっと運動」をおすすめします」精神看護2008年7月号(医学書院)より損保ジャパン総合研究所作成。

2 北澤一利、日本デイケア学会誌「デイケア実践研究」Vol.11, No.2, 2007。

3 座位姿勢から立ち上がり、3m先の印を折り返してきて着地する時間を計測する。

4 北澤一利他「歩行機能改善と転倒予防に「ふまねっと運動」をおすすめします」精神看護2008年7月号(医学書院)。

表3は要介護1から3までの介護認定を受けた高齢者38名を対象とし、ふまねっと運動参加群(以下、「参加群」とする)とふまねっと運動不参加群(以下、「不参加群」とする)に分かれて、それぞれTime Up & Go<sup>3</sup>(以下、「TUG」とする)を測定した結果である。参加群は、2007年8月から9月にかけて週1回、6週間続けて運動を行った。参加群は、TUGの歩数、最大歩幅、TUGのタイムともに6週間後に有意に改善したのに対し、不参加群にはいずれも有意な改善は見られなかった<sup>4</sup>。さらに参加群には、これら数値の改善のほか、歩く際のふらつきや、歩行姿勢の改善等が見られたほか、日常生活で車椅子を使わなくなったという事例も見られたという。

### (2) 心理面に関する効果

ワンツースリーでは、2009年、ふまねっと運動に参加した一般高齢者約110名に対し、ふまねっと運動に参加したことによる心理面での効果を測定した。健康に関するQOLを測定する質問紙「SF-8アキュート版」<sup>5</sup>による調査の結果、ふまねっと運動の参加者は「日常役割機能・精神」「全体的健康観」「活力」「精神的健康感」が有意に改善していた。また、調査後のアンケートでは、ふまねっと運動に参加したことにより、「毎日が楽しくなり気分が明るくなった」が約7割、「友人や家族との会話が増えた」が約4割にのぼった。さらに同調査に関わらず、一般にふまねっと運動の参加者は回を重ねるごとに表情が明るくなるのを見て取れるという。北澤氏は、ふまねっと運動は参加者の健康に関するQOLを改善することに加え、参加者の生活に活力を与え、うつや改善効果等が期待できるとしている。

### (3) 認知機能に関する効果

ワンツースリーでは、ふまねっと運動が、高齢者の注意、集中、記憶、判断などの高次精神機能を向上さ

5 米国で作成された、健康に関するQOLを測定する国際尺度。8つの質問より成り、以下の8つの健康感、(1)身体機能、(2)日常役割機能・精神、(3)体の痛み、(4)全体的健康感、(5)活力、(6)社会生活機能、(7)日常役割機能・精神、(8)精神的健康感を測定する。

せることによって、認知機能を改善する効果があると考え、2009年、北海道教育大学釧路校と共同し、認知機能の経時的変化を測定する国際尺度である「Alzheimer Disease Assessment Scale (以下、「ADAS」とする)」<sup>9</sup>と、近年開発された「タッチエム」<sup>7</sup>システムを使用し、ふまねっと運動が高齢者の認知機能に与える効果を測定した。その結果、ふまねっと運動を週1回、8週間継続することによって、ADAS、タッチエムとも一部の項目で有意な改善が見られた。北澤氏は、ふまねっと運動が認知症予防に利用できる可能性があるとして述べている。

## ワンツースリーの取り組み

### 1. ふまねっと運動の開発

ふまねっと運動は、北海道教育大学釧路校の学生の遊び感覚のアイデアが発端であったという。ワンツースリー設立以前に北澤氏がこれを取り上げ、効果の測定や理論的な分析を行い、また、同時に後述する地域の実践活動の中で改良を重ね、現在のふまねっと運動を作り上げた。現在も北澤氏を中心に新しいステップが考案され続けている。

### 2. ワンツースリーの設立とふまねっと運動の広がり

#### (1) 取り組みの背景と経緯

北澤氏が高齢者ボランティアによる活動を展開する背景として、北海道における市町村の過疎化が挙げられる。北海道には人口が1万人に満たない市町村が数多くあり、これらの地域は高い高齢化率に加え財政難に直面している。北澤氏は、これらの市町村では高齢者の生活を支援するための環境整備も整いつつあるとはいえ、継続的な取り組みのためには、年度によって方針や金額が異なる市町村の財源や支援策に頼らずに、高齢者である住民自身の主体的な努力で健康福祉社会を目指す必要があると考えている。そのため、ワンツースリーでは、単にふまねっと運動を高齢者の身体能力維持のための運動プログラムと位置づけるのではなく、地域の高齢者にサポーターとしてふまねっと運動の指導に当たってもらうことにより、「地域の協力する力」を引き出すことも活動の目的としている。

ワンツースリーの母体となった北海道教育大学釧路校保健体育科では、2003年から近隣の市町村から地域健康づくりの活動支援の依頼を受け、健康日本21に基づいた健康づくり計画の作成や、健康教室の開催などを行っていた。そうした高齢者を対象とした活動実践の場でふまねっと運動は実践され、その効果が明らかになるにつれてふまねっと運動はこれら健康教室の活動の中心になり、ワンツースリー設立の原動力となった。

ワンツースリー設立当初は学生が積極的に関与し、釧路を中心に小規模に事業を展開していた。しかし、ふまねっと運動の多地域展開と、サポーター制度による地域住民を主体とした活動が進むに連れ学生の関与は減り、現在はワンツースリーと地域住民主体の活動になっている。

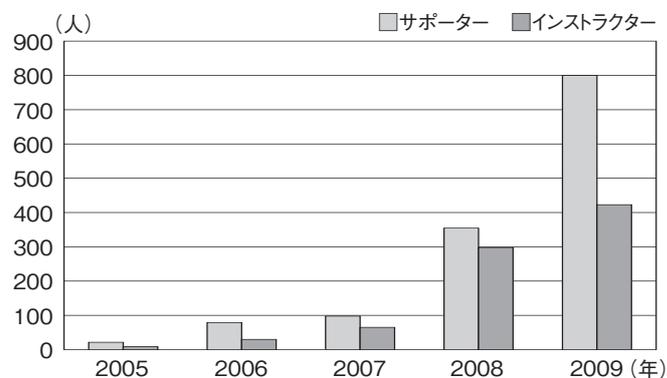
#### (2) ふまねっと運動の広がり

ふまねっと運動を用いた健康教室は、現在全道・全国に広がりを見せており、2009年10月の1ヶ月間で北海道内だけでも13市町村で80回以上開催されている。2005年度から認定を始めたサポーターは、2008年度から人数が大幅に増加し、2009年度末には800名を超え(図3参照)、申込状況から見て2010年度の早い段階で1,000名を超える見通しである。2008年度は、ふまねっと運動の知名度の高まりを受け、ワンツースリーの事務所を釧路から札幌に移し、専属の職員を置いた年である。これを契機に多地域展開が本格化し、サポーターや後述するインストラクターの人数が急増するきっかけとなった。

サポーターとして認定を受けているのは、一般の主婦が最も多く、それまで人前に出たことのないような一般高齢者が中心となっている。また、高齢者以外にも市町村役場や社会福祉協議会の職員などから養成講習への参加希望が増えつつあり、2009年度末で40歳代以下のサポーターは約1割を占めている。

また、ふまねっと運動の運動機能への効果に着目し、福祉施設や介護施設においても、介護認定を受けた高齢者を対象として、ふまねっと運動が実施されている。健康な高齢者よりも転倒の危険が高いこともあり、ワンツースリーではサポーターとは別に「インストラクター」と呼ばれる資格を認定している。インストラク

図3 サポーター、インストラクター数の推移



(出典) 取材内容を基に損保ジャパン総合研究所作成。

6 9項目の質問が音声で流れ、その正しい回答をPCのデスクトップ画面から選択する認知機能検査方法。記録される得点は「間違えた数」を表しており、各項目および合計点はともに0点が最高点となる。  
7 PC画面を複数に分割し、分割された画面が順に変色する。対象者はその順番を記憶し、タッチパネルで再現する。アルツハイマー型認知症の早期発見に適していると考えられている。

ターは、医療福祉関連資格（医師、看護師、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、介護福祉士、ヘルパー）を有する者、ふまねっとサポーターとして1年以上の指導実績を持つ者を対象とした資格である。ワンツースリーでは、2009年度末時点で189施設の約417名をインストラクターとして認定している。

現在、サポーター、インストラクターは、北海道を中心に仙台、東京、大坂、石川、福岡等に展開している。

### 3. 持続的な活動のための取り組み

#### (1) 持続的な活動のための課題

2008年度以降のサポーターの急増に伴い、事務局が多くの地域の活動に直接関与することが困難となり、新たな体制作りが求められるようになってきた。

##### ①サポーターの自主性の尊重と働きかけのバランス

北澤氏はサポーターによる自主的な活動を尊重したいと思いつつも、以下のような理由で完全な自主運営は難しいと考えていたため、サポーター中心の活動にも一定の働きかけを行う必要があると考えていた。

まず、安全性の確保が求められる。北澤氏によれば、ふまねっと運動は参加者が回を重ねて運動に慣れるにつれてスピードがアップしたり、成否を競うようになるケースがあった。これらは転倒事故につながる危険があるため、継続的にサポーターに対する継続教育を行い、安全面を維持することが必要であった。

次に、ステップの「マンネリ感」から参加者が減少するのを防ぐために、新しいステップを導入し続ける必要がある。ふまねっと運動を用いた健康教室は、回を重ねるごとに参加者が減少するケースがあり、北澤氏は、ステップが飽きられてしまうことが原因の一つと考えている。しかし、ふまねっと運動のステップは、危険性への配慮や運動機能向上効果を踏まえ、専門的見地から考案されているため、自己流のステップ導入は認めておらず、ワンツースリー本部が各支部に対して新しいステップを提案し続ける必要がある。

##### ②活動資金の確保

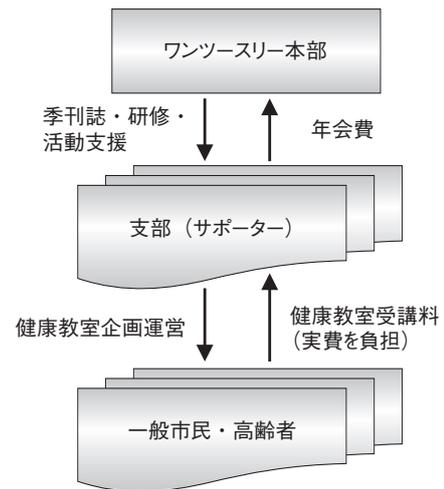
サポーターの継続教育、ふまねっと運動の開発など事務局活動のためには、継続的な収入が必要となる。ワンツースリーでは設立以来、活動資金を得るために、サポーター、インストラクターの養成講習を有料で実施するとともに、ふまねっとを有料で販売してきた。しかし、これらの収入だけでは十分ではなく、新しく継続的な収入を得る仕組みを作る必要があった。

#### (2) 組織体制の変更と商標登録の利用

##### ①組織体制の変更

こうした課題に対応するため、ワンツースリーでは、サポーター自らが企画運営できる組織的な基盤として

図4 ワンツースリーの新体制



(出典) 図3と同じ。

各市町村に「支部」を置くとともに、ワンツースリー事務局は「本部」（以下、ワンツースリー本部とする）として、支部の運営をサポートすることに活動の重点を置く新しい組織体制を敷いた。

支部は各市町村における健康教室やその他のイベントを自ら企画運営する権限を与えられ自主性が尊重される一方で、季刊誌や研修を通じた継続教育、人材育成を中心に、ワンツースリー本部より継続的な運営を行うための支援を受けることとなった（図4参照）。

##### ②ふまねっとの商標登録

また、ワンツースリーでは、「ふまねっと」の商標登録を行うことにより、ワンツースリーが関知しないところでふまねっとという用語を利用した活動が行われることを制限できるようにした。さらに、サポーター、インストラクターが、ふまねっとを名乗って活動を行うためには、年会費を納入して、資格を維持し、本部から継続的な支援を受けることを条件とした。これにより、継続的な支援を受けていない人がふまねっとを名乗って危険な指導を行うことを抑止するとともに、年会費については、ワンツースリー本部が活動するための財源に充てることとした。

#### (3) ワンツースリー本部の支援活動

##### ①季刊誌および研修

先述したような、支部活動における安全面の配慮、「マンネリ感」の打破を目的とし、ワンツースリー本部では新体制発足時から会員に対して、季刊紙の発行（図5参照）や各種研修を通じた継続教育を行っている。季刊誌では、新しいステップの紹介や継続運営のためのポイントに加え、実際の支部の好取組事例の紹介等が行われている。

##### ②サポーターの育成

支部の活動を支えるサポーターの育成は、ワンツースリー本部が実施している。一般にボランティア活動

図5 季刊紙「ふまねっとひろば」



(出典) 図2と同じ。

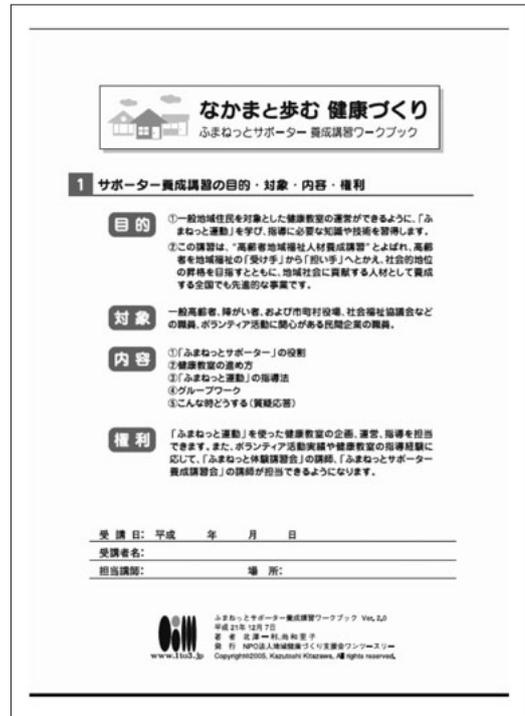
においては、ボランティア希望者がなかなか定着しないというケースが多く見られる<sup>8</sup>。ワンツースリー本部ではボランティアの定着度をできるだけ向上させるため、まず、「ふまねっと体験講習」を受講してもらい、そのうち興味を持った高齢者に対し、所定の「サポーター養成講習」を受講してもらっている。既にふまねっと経験者であり、サポーターになる意欲を持った高齢者に対しては、最初からサポーター養成講習を案内している。

また、サポーター養成講習は将来的には支部単位で実施してもらうことを考えているため、上記のように蓄積してきた健康教室のノウハウをテキストにするなど、ワンツースリー本部による講習の標準化が進められている(図6参照)。2009年度の後半からはサポーター養成講習へのベテランサポーターの参加が試行されており、実際に活動を行なっているサポーターの口から健康教室の様子や運動の概要の説明をするとともに、サポーターによる健康教室のデモンストレーションが行われている。

③サポーターのモチベーション対策の検討

北澤氏は、ボランティアであるサポーターの継続的な参加のために、今後サポーターのモチベーションに対する働きかけが必要になると考え、その前段階としてサポーターの現状把握のために「サポーターとして活動に参加する理由」についてアンケート調査を行った。アンケートは2009年12月から翌年1月にかけて実施し、送付した全サポーター700名のうち303名から有効な回答を得た。図7はその結果を示したものである。

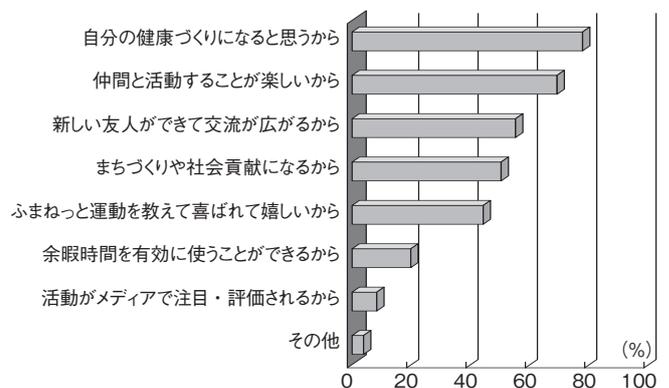
図6 サポーター養成講座のテキスト



(出典) 図2と同じ。

理由として多かったのは順に「自分の健康づくりになると思うから」(78.1%)、「仲間と活動することが楽しいから」(68.8%)、「新しい友人ができて交流が広がるから」(55.8%)、「まちづくりや社会貢献になるから」(51.7%)、「ふまねっと運動を教えて喜ばれて嬉しいから」(43.2%)であった。サポーターのモチベーションとして、サポーター自身への効用である、ふまねっと運動の効果と楽しさに関するものが上位2つを占め、続いて社会参加や地域貢献に関する事項が続いていた。モチベーションに対する特別な働きかけをしていない現在でも、サポーターの多くが、ふまねっと運動による健康の維持や楽しさ、また、サポーターとして地域社会に参加できていることにより、継続して活動に参加しようと考えていることが分かった。

図7 サポーターとしてボランティアに参加する理由



(出典) 図2と同じ。

8 桜井政成「ボランティアマネジメント」(ミネルヴァ書房、2009年)。

## 今後の課題

北澤氏は、市民が個人の自立した意志で健康づくりに取り組むことが望ましいと述べた上で、「人を引きつけることのできるふまねっと運動をツールとして、住民主体の健康づくりが行うことができれば、それが地域社会の協力する力を高めることにもつながります。それを継続的に達成することが、私の一番の願いです」と思いを語っている。その上で、今後の課題として、①活動資金の確保、②支部運営の自立度の向上、③既存リソースの活用を挙げている。

①については、商標登録に着目して会員から年会費を徴収する仕組みをスタートさせたが、依然として活動資金は潤沢とは言えず、引き続きの課題であるとしている。また、現時点ではサポーター、インストラクターの認定講習や登録、健康教室の運営に関する各種相談などの事務量が多いため、ワンツースリー本部が組織の拡大に耐えられなくなりつつあるという。このため、現在ワンツースリー本部がほとんど全てを担っている資格認定講習や会費の徴収業務を各支部で行うことなどを考えている。

②については、支部組織を設けてサポーターが主体的に活動できる体制を築こうとしているが、実際に自主的な運営が実施できているのは経験を積んだサポーターの多い一部の支部のみであるという。うまく機能している支部の取り組みを参考にし、継続的な支援やサポーターのモチベーションに対する働きかけを通じて、徐々に各支部の自立度を高めたいとしている。

③については、地域での活動を積極的に行い、地域の力を引き出すという目的に向かうために既存の団体等との協力関係が必要であるとしている。特に、社会福祉協議会との協力関係が築きやすいと考えており、仕組みづくりを検討していきたいとしている。

「ディージェズ・マネジメント・レポーター」は今後の誌面づくりに反映させていただくため、ディージェズ・マネジメントにご関心を持つ皆様からのご意見・ご要望等を随時募集しています。記事の内容、今後とりあげるテーマ等について、率直なご意見・ご要望等をお聞かせ下さい。

### ディージェズ・マネジメント・レポーター編集委員 (50音順)

慶應義塾大学大学院経営管理研究科 教授 田中 滋 (編集委員長)  
産業医科大学公衆衛生学教室 教授 松田晋哉  
名城大学薬学部臨床経済学教室 教授 坂巻弘之  
Gregg L.Mayer & Company, Inc., President グレグ・L.メイヤー  
広島大学大学院保健学研究科保健学専攻看護開発科学講座 教授 森山美知子

### ディージェズ・マネジメント・レポーター編集部

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1-2-3  
株式会社損保ジャパン総合研究所内  
(E-mail: dmr@sj-ri.co.jp 電話: 03-5256-8174 FAX: 03-5256-8177)

### 株式会社 損保ジャパン総合研究所について

株式会社損保ジャパン総合研究所は、損害保険業界初のシンクタンクとして1987年に設立された、損保ジャパングループのシンクタンクです。保険、医療、ヘルスケア、社会保障、金融などの諸分野で、調査・研究業務と情報発信を行っております。

### ホームページでは、機関誌「損保ジャパン総研クォーターリー」、「損保ジャパン総研トピックス」に公表したレポートを、PDFにて全文閲覧できます。

URL <http://www.sj-ri.co.jp/issue/quarterly/index.html> <http://www.sj-ri.co.jp/issue/topics/index.html>

〈ヘルスケア関係のレポート〉

- 「豪州におけるディージェズ・マネジメントの動向」(2010年4月15日発行 トピックスVol.7)
- 「米国の職域におけるウェルネス・プログラム—導入企業・団体および提供事業者の事例—」(2010年3月31日発行 トピックスVol.6)
- 「米国におけるウェルネス・プログラムの認証の動向」(2009年12月25日発行 トピックスVol.5)
- 「欧州におけるメンタルヘルス対策と取り組み—PRIMA-EFプロジェクトの成果の概要—」(2009年10月30日発行 Vol.53)
- 「米国のヘルスケア改革の動向—ヘルスケア改革法案の概要と法案審議をめぐる動向—」(2009年9月3日発行 トピックスVol.4)
- 「米国における健康保険市場と保険会社のヘルスケア事業—2007年を中心とする概況とConsumer Driven Health Planの動き—」(2009年6月30日発行 Vol.52)
- 「ドイツのディージェズ・マネジメント・プログラム—背景、施策、実施状況—」(2009年6月30日発行 Vol.52)
- 「米国の職域におけるウェルネス・プログラムの動向」(2009年4月10日発行 トピックスVol.3)
- 「米国の職域におけるウェルネス・プログラムとディージェズ・マネジメント・プログラムとの関連性」(2009年1月15日発行 トピックスVol.2)
- 「米国ヘルスケア分野における健康リスク評価のための予測モデルの活用—その概要と背景、および米国アクチュアリー会2007年報告書の解説—」(2008年10月31日発行 Vol.51)
- 「ドイツ民間医療保険市場の動向—公的医療保険との関連と民間医療保険業界の展開—」(2008年8月29日発行 Vol.50)
- 「2006年米国健康保険市場データ」(2008年4月30日発行 トピックスVol.1)
- 「米国におけるメンタルヘルス分野のヘルスサポートの取り組み」(2007年12月31日発行 Vol.49)
- 「米国のディージェズ・マネジメントにおける予測モデルの活用」(2007年11月30日発行 Vol.48)
- 「米国における健康保険市場と保険会社のヘルスケア事業—2005年を中心とする概況と最近の動き—」(2007年10月31日発行 Vol.47)

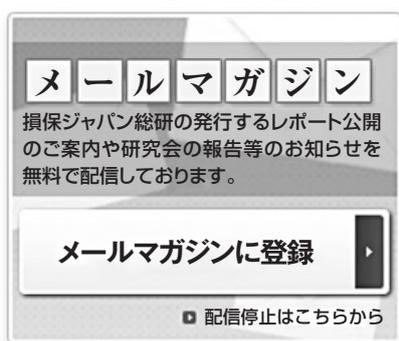
### ©株式会社損保ジャパン総合研究所

転載、引用の際は、出典として以下の通り明記してください。

「損保ジャパン総合研究所「ディージェズ・マネジメント・レポーター No.18」(2010年6月)」

なお、転載の際は、事前に編集部までご連絡ください。

## 損保ジャパン総合研究所メールマガジンについて



損保ジャパン総合研究所メールマガジンでは、当研究所の発行するレポート公開のご案内や研究会の報告等のお知らせを配信しております。ホームページのトップページよりご登録いただけます。ぜひご活用ください。

**URL <http://www.sj-ri.co.jp/>**